

霸王別姫図 原在中 一幅

絹本着色

天明五年（一七八五）

本紙一六一・八×八六・四



本図は、原在中（一七五〇～一八三七）三十六歳の作品で、中の作品の中でも比較的早い時期の作品である。描かれる人物や草木には応挙の影響が色濃く反映しているながら、精緻で華麗な作品に仕上げ、彼独自の画風の特徴も備えている。応挙の高弟に数えられるだけあって、その優れた画才が窺える作品でもある。本図の画題は中国の古典『史記』に取材し、項羽が四面楚歌の状況の中で、虞妃と最後の酒宴に臨んだ「霸王別姫」の場面を主題としているのではないかと考えられる。

在中は、京都の生まれ。生家は酒造業を営んでいたが、絵を好んで狩野派絵師・石田幽汀に学び、山本探淵にも師事し

たと伝えられる。円山応挙の画風を慕ってその一門に入り、応挙と共に円山派の発展に寄与し、独自に原派という一派を築いた。中国や日本の古典、名画をよく学んで山水画、人物画を得意とし、応挙と共に研鑽を重ねた。大乗寺、寛永度内裏御造営にも共に参加している。安永四年（一七七五）の『平安人物志』にわずかに二十六歳で登場しており、早くから評価を得ていることが判る。応挙没後も大社寺や内裏の御用を行って活躍しており、老いてもなお細かな筆致と華麗な色彩は健在で衰えを感じさせず、京都画壇の中心的存在として長く活躍し、円山派の拡大に貢献した絵師であった。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に¹出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections